



最先端技術にふれる100分

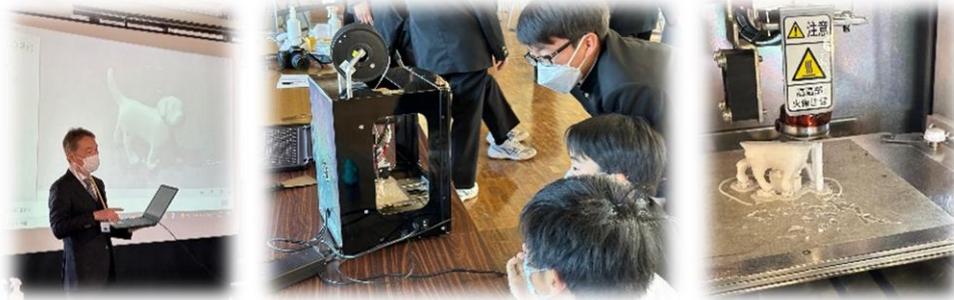
3Dプリンター・VR・ドローン

勝山中学校

未来の技術だと思っていたものが、急速に身近なものになってきました。遊び、ゲームの道具として使われてもいますが、実証実験が行われたり、産業や経済に結びつきはじめたりと将来性が期待されています。もちろん子どもたちが将来、最先端技術を用いた職業に就いている可能性もあります。

勝山中学校では、都留文科大学で情報科学について研究されている吉岡先生の出前授業を行い、全ての生徒がVRの世界とドローンの操縦を体験し、また3Dプリンターでモノが作られる様子を見学しました。

VRとは日本語では「仮想現実」と呼ばれています。専用のゴーグルの中に、人間の視界を覆うような360°の映像が映り、実際にその空間にいるような感覚を得られる技術です。生徒は順番に一人ずつゴーグルを装着し、海の中や大空の上にいる感覚を味わいました。



3DプリンターはPCで作られた3次元の設計図どおりに、立体をつくることのできる装置です。この日は、犬の模型を20分くらいかけて作る様子を見学しました。

小型のドローンはタブレット端末を使って操作しました。自動で高度を保つセンサーがついているため、上下左右の動きを指示するだけで簡単に操作することができます。生徒が担任の先生の手の上のひらの上にドローンを着陸させると、大きな歓声があがりました。

授業の終わりに、吉岡先生が技術の使い方について大切な話をされました。

「こうした最新の技術は自分にとっては楽しいのですが、他の人にとっては迷惑ということがたくさん出てきます。皆さんもインターネットの書き込みやツイッターとかTik Tokを知っていると思いますが、そういう所で自分がおもしろいと思って書いたことでも他の人が傷つくことってすごくたくさんあります。それがわかりにくいのが最新技術です。ですからこうした最新技術を使うときにはぜひ、人のことを考えて使ってください。」

使う人の心次第で便利なモノにも人を傷つける凶器にもなるのが道具。刃物と同じです。



700年つづく伝統に学ぶ

全校かるた大会 河口湖北中学校



しんと静まりかえった教室の空気は凜として、その中に朗々とひびく札読みの声。あるときは上の句が読まれたと同時に一齐に、またあるときは下の句まで読み終わった後しばらくして、生徒達の手は取り札を目標し机上をはしります。

競い合う中にお手つきあり、またお目当てを探して迷う手あり。札がとられると張り詰めた空気は一気に和み、談笑がはじまります。とった人を誉める声、取り札に対する思い、しくじった振り返りなど、やりとりは全ての机で札がとられるまで続きます。やがて口

が閉じられ、空気が再び張り詰めていきます。緊張したり、緩んだりを繰り返して、競技者の手元にそれぞれのとった札が積み重ねられていきました。

河口湖北中学校では、3年ぶりにかかるた大会が復活しました。当初は全校一齐で行う予定でしたが、コロナ感染拡大防止のため学年ごとでの開催になりました。かるた大会は、楽しみの場であると同時に学びのまとめの場でもあります。大会を前に、生徒達は百人一首について学びを重ねてきました。学んだことの評価は繰り返し行われ、満点を獲得した生徒は、当日競技かるたと同様の一対一で、それ以外の生徒は4人一組で競いました。



河口湖北中学校ではねらいを3つ掲げています。

- (1) 伝統文化に親しむ態度を楽しみながら身に付ける。
- (2) 遊びを通して歴史的仮名遣いにふれ、古典を身近に感じるきっかけにする。
- (3) 全校の交流を深めると同時に対抗意識を燃やし、進んで学ぶ習慣を作る。

また、競い合いに勝つためには、多くの歌を覚えている方が有利であるため、暗記する力を高めることもねらいの一つになっています。

競技の様子を見ていると、学年によって速さに違いがあることに気がきました。1年生よりも3年生の方が、手が動き出すまでの間が短いのです。ただこの2年間はコロナ禍で開催できなかったため、3年生にとっても今回が初めての大会でした。さすがの3年生でした。

百首もあれば、当然好みも生まれます。自分の好きな札、今時の言葉で言うなら「押し札」といったところですが、この押し札については、おもしろいことに学年ごとの差があまりないように見受けられました。読み手が読むと同時に最も多くの生徒が反応した、湖北中生にとって一番の押し札は「ちはやぶる 神代もきかず竜田川 からくれないに水くくるとは」でした。取りたい気持ちがぶつかり合って見えない火花を散らしている様もいとおかし。